

INTERVIEW

日本医学会会長
公益社団法人地域医療振興協会 会長
高久史麿先生



【プロフィール】 高久史麿先生 1954年東京大学医学部卒業。群馬大学医学部助手、東京大学医学部助手、シカゴ大学留学などを経て、1972年から自治医科大学内科教授。その後、1982年より、東京大学医学部第三内科教授。1988年から1990年まで医学部長。1990年に国立病院医療センター病院長に転任。1993年から国立国際医療センター初代総長。1996年に定年退官後、同年から自治医科大学学長。2004年から日本医学会会長を務める。2012年より自治医科大学名誉学長、同年、瑞宝大綬章を受章される。

高久史麿先生、瑞宝大綬章受章！

若い人や社会のために 役に立つこと、 それが自分の使命。

聞き手：山田隆司 公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

あまり勉強ができなかった子ども時代

山田隆司(聞き手) 今日は日本医学会 会長室に高久史麿先生をお訪ねしました。高久先生、このたびは瑞宝大綬章のご受章、おめでとうございます。高久史麿 ありがとうございます。

山田 先生のご受章を自治医大卒業生として本当に嬉しく思っていますので、今日は「月刊地域医学」の誌面でぜひ先生のご足跡を紹介したいと思います。

まず先生が医師を志されたきっかけを教えてください。

高久 私は小学生のころは非常に成績が悪くて中学でもまあまあでした。実は中学の時に朝鮮から引きあげてきました。引きあげ後九州の小倉中学へ転校しました。当時旧制中学は5年制でしたが4年生でも高等学校の入学試験を受けることができる制度がありましたので、4年生の終わりごろに猛勉強をしました。それまではあまり勉強しませんでした。一生の中でいちばん勉強したのはその時ですね。

山田 そのころすでに医者を目指していたのですか？

高久 いやいや、全然です。そのころ私は物理に興味がありました。数学が好きで物理に興味がありました。私の兄が医者になりたくて京城大学の予科の医学コースへ行っていました。引きあげてきて結核になって何年か休学したためにあきらめました。

熊本の五高(旧制第五高等学校)に入ったのですが、理Ⅰという理学部と工学部に進むコースと理Ⅱという農学部と医学部へ進むコースがあって、私は物理が好きだったから理Ⅰに入って、ずっとそのつもりでいました。ところが五高の物理の先生の講義があまりにも面白くなくて(笑)3年になるころにはもう物理をやめようと思いました。しかし工学部は図を描くのが苦手で、一方農学部はあまりピンとこない、そうすると医学部しかない。当時私は教会に通っていたので、ヒューマニズムというか、人を助けるといふ意味ではやはり医学部が良いのではないかな

と思いました。ですから、3年になってからあわてて、動物・植物の講義に出席するようになりました。昔の高等学校は自由に講義を受けられましたから。

当時私の自宅は小倉にありましたから九大へ行くつもりでした。ところが高校最後の3年の冬休みに全国の高等学校のYMCAの会が広島県の宮島であって、何十人かが集まりました。そうしたら、東京から来た人たちがよく見えたのです。それで広島から小倉への帰りの汽車の中で考えて、「やっぱり東大へ行こう」と決めました。

昭和22年、終戦直後だったので特別な制度があって、国立大学を2つ受けられました。

山田 九大と東大と両方受験できたのですか？

高久 できたのです。それで東大の医学部へ入学し、YMCAの寮に入ってYMCAの活動もずいぶんしました。川崎市でのセツルメント運動にも参加していました。それからYMCAの寮に卓球台があったので年中卓球をやっていました。大学に入ってもそんなことばかりしていて、だから1時間も出ていない講義がいくつかありました。

山田 そうなのですか？

高久 衛生学もそのひとつで、講義に1時間も出ませんでした。それである冬の朝、口頭試問を受けに行ったらストーブに石炭をくべている人がいました。用務員だと思って「教授室はどこ？」と聞いたら「あそこだ」とばかに威張っているなどと思って、試問の時間になって教授室に入ってみたら、その人が教授でした(笑)。そんな状況でした。それでも昔はそんなに厳しくなかったので卒業試験も無事通りました。

アメリカで学んだこと

山田 学生時代から、内科に進もうと思っていたのですか？

高久 内科の臨床講義は意外とまじめに出ました。あのころは患者さんに講堂に来てもらって皆の

目の前で学生が患者さんの診察をすることができたので面白かったですね、でも内科に決めていたわけではなく、1年間のインターンで内科といくつかの科をまわりました。そうしたら唯一引っ張ってくれたのが眼科で、私もせっかく引っ張ってくれたから眼科に行こうと思っていました。

山田 東大の眼科ですか？

高久 そうです。ところが九州の母親から電話がかかってきて「眼科はやめておけ」と言うのです。ほかに回ったところは内科だけだったので内科にすることにしました。私を引っ張ってくれた眼科の講師のところへ「やはり内科に行きます」と断りにいったところ、その講師が「いいよ、いいよ、今年は眼科に2人入るから」と言ってくれました。当時の東大は1クラス110人くらいでその年は2人、国家試験に落ちました。そうしたら2人とも眼科志望でした(笑)。それで第三内科の沖中内科に入りました。

山田 なぜ沖中先生の第三内科に入られたのですか。

高久 沖中重雄先生の講義がいちばん面白かったですね。沖中先生は臨床講義の前には症例について遅くまで勉強されていたようで、それが感じられたのだと思います。

沖中先生は神経が専門でしたが、循環器と内分泌にも興味を持っておられたので、神経、内分泌、循環器が沖中内科のメインでした。私が入局する1年前から東大で臨床の部門にも大学院制度ができて、一つの科に3人が大学院に行けることになりました。私も大学院に行こうかと思っただけでその時の医局長に「私も大学院に行こうかと思う」と言いました。早速、沖中先生に相談してみると言われ、その後沖中先生が「高久は学校の成績が悪いから駄目だ」と言われたと聞きました。そう言われればそうだと納得しました(笑)。結局神経と内分泌と循環器を専門にする同級生が一人ずつ3人大学院へ行きました。

血液は当時助教授の中尾喜久先生がグループの長でしたが、沖中先生はあまり血液に興味がなかったので血液はマイナーで医局員も少なかったです。だけど私の指導医は血液が専門で面倒見のいい方で「血液をやらないか？」と誘ってくれたので、血液に入ることにしました。

山田 たまたま出会われた指導医に導かれてなのですね。

高久 やはり運ですね。血液は第三内科の中でマイナーだったわけですが、私は中尾先生の下につき、間もなく頼りにされるようになって、血液学会のシンポジウムの仕事なども手伝いました。

山田 そのころから先生は血液疾患の患者さんを中心に診ていたのですか？

高久 いえいえ、当時内科は縦割りではなかったのでいろいろな病気の患者さんをたくさん診ました。ある患者は外来で脾臓癌という診断を告げられて入院してきました。でも私が触診してみても何度触っても腎臓しか触らないのです。それで沖中先生の回診の時に「私は腎臓しか触らないのですが」と言ったら、沖中先生は「君、これ腎

高久 史磨 先生

ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

瑞宝大綬章を受章され、おめでどう御慶び申し上げます。心からお祝い申し上げます。

受章を新聞で知りインターネットで拝見し、懐かしさが増し、つつい筆を取ってしまいました、お許し下さい。

ご記憶でしょうか、東大病院 中尾内科 主治医 高久先生 白血病患者()の兄()で御座います。当時不治の病とは知りながら無理なお願ひし、最高の治療を施して頂き有り難う御座いました。

1970年4月29日修が永眠しました、その時学会の都合で立ち会うことが出来なかったとしてお忙しい中を羽田空港まで、別れにおいで頂きました。42年前のことで御座います、私にとってはつい昨日のように思っております、と申しますのも先生の心の優しさとお人柄に触れたからで御座います。その時はほんとに有り難う御座いました。

現在では、先生方の研究の成果が現実のものとなり、骨髄移植で完治の方向へと進歩して参りました。

これからもお体を大事にされ益々のご健勝を陰ながらお祈り申し上げます。私も83歳になり家内ともども余生を楽しんで過ごしております。

この度はほんとおめでどう御座います、失礼をお許し下さい。

2012年11月10日

40年以上も前に担当した患者さんのご家族からお祝いのメッセージが届けられたそうです。先生の患者さんに向き合うお人柄がうかがえました。(山田)

臓だよ。癌でもなんでもないよ」と言われました。それを患者さんが聞いて「癌で東大病院に入院するのだからと親戚中で水杯を交わしてきたのに何でもないと何事だ」と怒られたこともありました(笑)。もう一人印象に残っているのは、神経症状が出て神経外来に通っていた患者が、脊髄の病気と診断されて入院してきましたが、実は悪性貧血によるものだったという例がありました。そういう意味ではやはり専門に特化することの弊害を感じますね。

それから、血液の研究をしていましたのでエリスロポエチンの中心的な研究機関だったシカゴ大学に留学しました。でもアメリカで学んだことの多くは研究よりも、教授と学生の関係についてでしたね。アメリカは日本と違って教授と学生が友だちのように気安く付き合っているのです。それから上の人が「自分がリーダーになれたのは、若い時に上の人からピックアップされたお蔭なので、自分の使命は若い優秀なドクターを見つけてその人にチャンスを与えることだ。それが自分がヘッドになった最大の使命だ」と。そういう考えを持っているのですね。なるほど、アメリカというのはこういう形でアメリカンドリームのような人が出てきて発展してきたのだなと思いました。当時の日本にはそういうムードは全くありませんでした。研究論文でも、全くかかわっていない教授の名前がファー



ストネームになる時代でしたから。

またある時、シカゴ大学医学部に奨学金をかなり出している家に留学生が夕食に招待されたことがありました。ところがその家の息子はアルバイトをしながら大学へ通っていたのです。その理由を父親に尋ねたら「あの息子はあまり出来がよくない。だから同じお金を出すならシカゴ大学の医学部の学生にお金を出した方が社会のためになる」と。もちろんそれは一部の人の考えだったかも知れませんが、それでも当時の日本には全くそういう発想はありませんでしたね。

山田 アメリカにはどのくらいいらしたのですか？

高久 1年です。シカゴ大学のボスがエリスロポエチンの研究の中心でしたが、私は白血病に興味があったので1年で帰ってきました。

自治医大開学を手伝う

高久 自治医大の話が出たのは私が40歳の時でした。1971年の2月11日で、2月11日は私の誕生日ですが、休日に中尾先生から「自宅に来てほしい」という電話があったので行ってみると「自治医大の学長という話がある。どうしたものだろう？」と。「先生、みんながいっしょに行けるのだ

から引き受けてください」とお願いし、中尾先生は引き受けられることになりました。

場所は栃木だということで、中尾先生がどんなところか見にいってほしいというので、日曜日にスバル360に乗って国道4号線をとろとろ行ったらなんにもないところでした(笑)。

それから教員を集めるためにいろいろな評判を聞いて、情報を調べて、電話をかけまくりあって、スカウトしました。

山田 では、初期の人選にかかわられたのですね？

高久 何人かは中尾先生からのご推薦でしたが、それ以外の人選はほとんど私がしました。

山田 開学時、錚々たる教授陣でしたが、先生の人選だったわけですね。

高久 そうです。当時教員住宅が宇都宮にあってそこに住んでいましたが、アメリカの教授が教室以外のところでは学生と友だちのように付き合うというのに倣って、それを実行していました。いろいろな学生が宇都宮の私の家に遊びに来ましたね。

山田 そうですね。本当にそういうマインドを感じる先生たちが多かったので、教員住宅へ行った食事をごちそうになったり、いろいろお世話になりました。

高久 教員もみんな若かったです。若い優秀な教員に来てもらった。それもアメリカで学んだことの一つでした。

その後1982年に東大第三内科の教授選があり、私は自治医大から東大の第三内科教授に着

任しました。医局の歓迎会で私を血液に引っ張ってくれた先生が、開口一番「高久君が第三内科の教授になるとは思わなかった」と(笑)。私も「私自身も夢にも思わなかった」と。当時東大第三内科の教授といたら、内科のトップという感じがしていました。その時に思ったのは、もうこれ以上偉くなる必要はないから、これからは下の人や社会にサービスしようと覚悟したので。だからそれ以後は、自分がどうこうするために働くということはほとんどありませんでした。東大には若い優秀な人がたくさんいましたから、その中で優秀な人を引っ張ろうと思いました。しかも当時の内科は西高東低で、東大は痛も免疫もやっていた。この流れを変えて東大を盛り返すには分子生物学を内科の研究に取り入れることだと考えました。それで分子生物学の研究室を開き、故 平井久丸先生をヘッドに据えて、宮園浩平先生、間野博行先生、石川冬木先生など優秀な人材が集まりました。

東大を退職した後は国立国際医療センターに5年いて、それから自治医大学長に就任しました。

今の自分があるのは運がよかったからだと思っている

高久 私は自治医大の学長を16年間務めました。自分が非常に幸せだったのは、私が着任したころ、自治医大の卒業生は義務年限を終わって活躍し始めたころで、それが私がいた16年の間にどんどん目立ってきて、地域医療といえば自治医大ということになってきました。

ですから、私がこの度叙勲されたのは、一つは東大の時に優秀な若い人を見つけて目をかけて来た人たちが今の日本の医学界で活躍されるようになったこと。また自治医大の卒業生が地域

で頑張り、地域医療の活躍者としてマスコミにも取り上げられたこと。天皇皇后両陛下も地域医療の大学を見たいということで自治医大に来られました。ですから私は運がよかったと思っています。皆さんの活躍が非常に目立った時代に学長を務めることができました。

山田 私たちにとっては、学生時代に身近で親しかった先生が大学の学長に就任され、また卒業生を評価してくださった。先生が学長を務められた16年間「自分たちは自治医大の卒業生だ」と

いう思いをごく自然につないできたような気がします。開学以来、中尾先生、高久先生という日本の医学界でも中枢におられる先生方にわれわれ自治医大卒業生は本当に暖かく見守っていただいたという思いです。ですから3月に先生が学長を退任された時は、母屋に親がいなくなったような、少々寂しい気がしました。

高久 しかし、今いろいろな大学に地域枠もできましたので、自治医大も変革すべき時期を迎えています。卒業生も育ってきていますので、ちょうどよい時期だったのではないのでしょうか。

山田 先生がおられた16年間の間に、義務年限が終わった卒業生は地域で活躍し本当に社会的評価が高まったと思います。しかし今、自治医大だけでは解決できない地域の医療崩壊といったさらなる大きな問題が起こり、全国の医学部に地域枠、あるいは地域医療学講座がたくさんできています。これからも自治医大が地域医療を担う大学として一定の役割を果たしていくためには、大学運営も変わっていかないといけないという気持ちを私も持っています。



聞き手：地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長 山田隆司

高久 これからがまた大変だと思います。

山田 われわれ地域医療振興協会が、へき地医療を支える公益法人としての役割を果たすために、自治医大と一心同体でこれまでやってこられたのは先生のお陰と感謝していますが、今後さらに大学と関係を深めていかななくてはならないと思っています。先生にはこれからも協会の会長としてかかわっていただけるので、本当に有り難いと思っています。

日本の医学界のトップとしての責任

山田 先生は現在日本医学会の会長として、事実上日本の医学界のトップという立場でられます。医学界のトップが「地域医療」を理解してくださっていることが、われわれにとっては大きなチャンスだと思っていますが、一方でこの日本医学会としては、今後どんな動きを考えていらっしゃるでしょうか？

高久 日本医学会は平成26年に一般法人として日本医師会から独立することになっています。ところが、これまでは日本医師会から費用が出ていましたが、独立すると運営費用を各学会で賄っていかなければならない。基礎系の学会などは

会員数が少なくきびしいところもあるので、それが懸案事項となっています。

山田 私からすると、学術団体である日本医学会が組織上日本医師会の下部組織であるというのも違和感がありました。

高久 もともと終戦後にできた形ですから。もちろんこれからも日本医師会と協力しながらやっていきますが、定款上医師会の下となっているのを変えていきたい。すぐに定款を変えるのは無理だとしても法人化することは可能です。そのことは原中前会長の時に了解を得られ、現在の医師会のキャビネットも了解しています。

山田 やはり各学会が独立した立場を持った方がよいし、一方で、社会に対して学術団体として責任ある意志決定をすることも重要ですよね。

高久 そのとおりです。ですから、最近ではなるべくいろいろな学会と共同声明などを出すようにしています。今話題になっている出生前診断に関しても、近く産婦人科学会とともに厚生労働省に対して見解を申し入れる予定です。

山田 なるほど、学術的な団体として国民に責任の持てるステートメントがしっかり出せるように、政治的にどこからも影響されない団体であることが必要ですね。

高久 そうです。またそういった声明は単独の学会で出すよりも、複数の学会で出したほうがインパクトがあります。単なる専門家集団ではなく医学界全体としてそういう考えがある、一つの学会の考えではないということの方がよりインパクトがあると思います。

山田 医師の中でも、意見対立がある、利益相反が生じるような問題を扱う際には、ことさら政治的

に中立であるべきですよ。

高久 そうですね。そういう意味で今回の叙勲も、医学会会長として発言する時に少しプラスになるかなと思っています。

山田 先生の今回の叙勲は、われわれ医師として大変誇らしいことですし、みんなが自信を深めることにつながったと思います。先生がこれまで医師として果たしてこられた業績に敬意を表したいと思いますし、今回の先生の受章に託された社会からの期待も大きいのだと思います。われわれも地域医療を実践する中で厳しいことは多いですけど、自治医大の卒業生としてやらなければいけない、また協会という組織が社会から託された一つの使命だと思って頑張りたいと思います。

高久 私も役に立てるようにまだ頑張りますよ。

山田 これからも先生に導いていただければと思います。今日はお忙しい中ありがとうございました。

